

ラヴロフ外相：ワシントンの率いる西側ブロックは、すべての国家を平等とする国連原理を拒否

RT (Russia Today)

September 27, 2014

アメリカの率いる西側ブロックは、表向き民主主義を擁護しながら、国連憲章によって保障された主権国家の平等という原理を拒否している、とロシア外相セルゲイ・ラヴロフは国連総会で演説した。



「アメリカに率いられた西側同盟は、民主主義、法の支配、個々の国々の人権の擁護者として振る舞いながら、国際の間ではその正反対の立場から行動し、国連憲章によって神聖視された国家の主権という民主主義原理を否定し、何が良く何が悪いかを他者に対して決めつけようとしています」と、ラヴロフは土曜日、ニューヨーク国連本部における第69回国連総会で話した。

ラヴロフ外相が特に念を入れて強調したのは、「共通の難題に対する適切な答えを見いだすための仲間同士の集団的行動の必要と、もう一方で、ある国々に見られる支配意欲、排他的な“我々と彼ら”という論理に基づく古代遺物のようなブロック精神の復活の間の、ますます顕著になってきた矛盾が存在する」ということだった。

ラヴロフは加えて、ロシアは、妥協して利害のバランスを考慮する用意はあるが、ただしそれは相互の尊敬に基づき、対話が「正直で、敬意に満ち、平等のもの」である場合に限ると述べた。

外相の言葉によると、「最後通牒という方針、優越性や支配の哲学」は、「多重中心の民主的世界秩序」の形成を含む 21 世紀の要求に、真っ向から逆らうものである。

ラヴロフは、新しい仕切り線を作り出すことはヨーロッパでは受け入れられないと強調し、「誰も真理に対する独占権をもたない」、また誰も「自分の必要に合わせて」地球的・地域的な生産過程をカスタマイズすることはできないと言った。

共同の努力というものは、BRICS、上海協力機構（SCO）、G20、国連安保理などの枠組みでなされているように、相互の敬意と相互の利益の考慮という原理の上にはしか建設することはできない、とラヴロフは言った。



このような努力の結果は、イランの核問題のポジティブな進歩や、シリアの化学兵器の完全破壊の成功に見ることができる。

ラヴロフによれば、「従うべき」その例は、9月5日と19日のミンスク合意であって、それはウクライナ危機からの脱出のロードマップを提示し、ウクライナの EU 加盟合意の発効の日付に妥協点を見いだしている。

彼は、ロシアは常に、ヨーロッパとユーラシアでの「調和的な」統合プロジェクトを呼びかけてきたと言った。

「このような〈統合の集約点〉の政治的基準とタイムラインがあれば、〈ヘルシンキ+40〉の議題を論ずる OSCE の仕事に真の貢献をすることになるでしょう。」

「この仕事のもう一つの重要な領域は、ヨーロッパ - 大西洋の政治・軍事構築物のイデオロギーから自由な、実践的議論を始めることでしょう。これによって NATO や CSTO（集団安全条約保障機構）の加盟国だけでなく、ウクライナ、モルドヴァ、グルジアを含む領域のすべての国家が、平等で不可分の安全保障を享受し、“我々につくか、我々に敵対するか”（注：子ブッシュの言葉）といったまやかしの選択をしなくてもよくなるのです」とラヴロフは言った。

<http://rt.com/news/190552-un-leaders-quotes-islamicstate/>

西側ブロックはその基準に従って「人類を縦に構築する」方針を取ってきたのであり、これは「とうてい無害とは言えない」とラヴロフは言った。

「冷戦の勝利と〈歴史の終わり〉の始まりを宣言して、アメリカと EU は、ヨーロッパのすべての国民の合法的な利益を考慮することなく、地政学的な空間の拡大に専念してきたのです。」